



ともだち思いで、なかまをひろげる子

暑い夏でした。そして自然災害にも翻弄される夏でした。幸い私たちの住む千葉市では、台風や大雨などでの大きな被害はなかったようです。その後の地震の影響も受けず私たちは日常生活を続けていますが、日本中が大変な夏になってしまいました。被災地から遠く離れている私たちですが、悲しみや不安の中にある人、不自由を強いられている人たちがいることを忘れずにいたいと思います。“私に出来る事”を皆が少しずつ出来たらと思います。

さて、愛隣幼稚園の保育目標を考える4回目は「ともだち思いで、なかまをひろげる子」です。皆さんもご存知のとおり、「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイによる福音書 22 章 39 節）という聖書の言葉が「愛隣」という幼稚園の名前になっています。そしてこの保育目標は、「愛隣」に繋がっています。

親や大人はよくこんな風に子どもに言います。「ほら、お友だちと仲良くしなさい。」「みんなと仲良くしないとだめでしょ。」私は“仲良く”とか“仲良し”という言い方があまり好きではありません。なんだか薄っぺらくて、嘘っぽく聞こえてしまうからです。（これはあくまで私感です。）きっと、先に書いたような使い方を大人たちがしていて、それが嫌だったのかもしれない。自分の娘たちにも使わない言葉だったように思います。“仲良くする”って本当はとても難しいことです。愛隣の子どもたちは、たんぼぼ組からばら組の頃はよく喧嘩をしています。＜取った取られた＞＜叩いた叩かれた＞＜貸してくれない、替わってくれない＞それこそく仲間に入れてくれない＞etc.理由はいくらでもあります。私たちは子どもたちの声を丁寧に聴きます。気持ちを言葉にして伝えられるようになることから始めます。伝えられるようになったら、次は聴けるようになることを大事にして関わります。気持ちは表明していい、でも、叩くのではなく言葉にして。なんでも我慢して自分の気持ちに蓋をして仲良くなるのではないのです。私の気持ちを聴いてもらえる、ということが大切です。まず保育者に、そして仲間に気持ちを聴いてもらい、私が大事にされていることを感じて初めて、子どもたちは仲間の言葉を聴くことができるようになります。自分の気持ちが大事にされると、仲間の気持ちを大事にすることができるようになります。ただ「仲良くしなさい！」と言われると、「（あなたの気持ちはどうでもいいから）仲良くしなさい！」と言われているように私には聞こえてくるのです。私はこの保育目標が掲げられたとき、愛隣の職員ではありませんでした。ですからここに「ともだち思いで」という言葉が使われている経緯を知らないのですが、まさに願う姿はともだちの声を聴き、ともだちを思い考える子どもの姿です。そして更に「なかまをひろげる子」と保育目標は続きます。愛隣が願うのは「気の合う仲間の輪をひろげる子」ではありません。それは簡単なことです。むしろ「自分と違うあの子とも仲間になっていく子」の姿を私たちはこの保育目標の中に描いています。愛隣の3年間はこのことにも力を傾けます。たんぼぼ組の子どもたちはどの子も万能感でいっぱいです。自分はいい！と思える時代です。まだまだ世の中は自分中心に回っています。自分のことで精一杯ということでもあります。その子たちがばら組になると、周りの子どもたちの存在を意識し始めます。自分と仲間を比較します。自由にのびのびと絵を描いていた子が、急に絵を描きたがらなくなったりします。自分と違うという事に気付き排除しようとしたりします。安心できる気の合う仲間だけで小さなグループを作るのもこの時代です。その時に私たちは、違うという事に気付いた子どもたちの気持ちを否定しません。幼稚園の生活、あそびの中で、子どもたちにはひとり一人“違っている”ことをむしろ知ってほしいのです。そして“違っている”自分が否定されないことを知り、仲間に対しても“違っていていい”と認め合える関係を築いていってほしいと願います。誰もが否定されず、尊重されて私らしくいることができる生活をいいものとして実感してほしい。そして卒業を迎える時には、クラスの子どもたちだけでなく、幼稚園中に仲間をひろげる子どもたちになってほしいのです。“ひろげる”という言葉には、“違い”を超えて仲間になっていこうという意味が見えます。神様は私たちに『隣人になる』ことを求めておられます。子どもたちが仲間を思い、仲間をひろげていくように、私たち大人も、『隣人になる』人になりたいと思います。